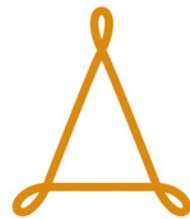


北のとびら



HOKKAIDO
ARTS FOUNDATION

発行／財団法人北海道文化財団

特集

「アートゼミ事業」特別講座

コミュニケーション／ 表現教育へのアプローチ

インタビュー

山本 郁実

【木管五重奏団 ウィンド アンサンブル・ポロゴ 代表】



88
MARCH 2011

平成22年度 北海道舞台塾公演

「ぐるぐる、しない」

[下川公演]平成22年12月19日[日]

下川町公民館

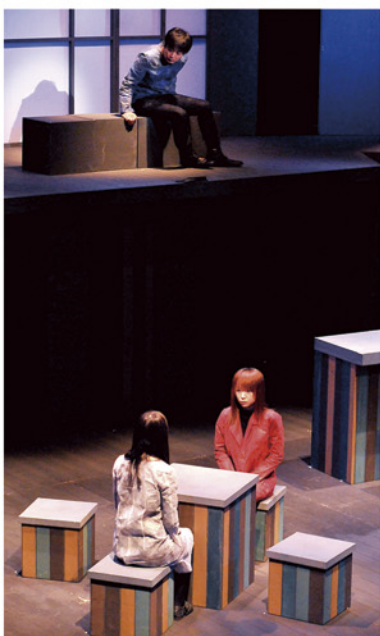
[札幌公演]平成23年1月14日[金]・15日[土]・16日[日]

かでの2・7 北海道鍼灸専門学校かでのホール

主催:北海道舞台塾実行委員会、北海道、財団法人北海道文化財団

助成:財団法人地域創造

入場者/下川公演165名、札幌4公演830名



北のとびら

No.

88

MARCH 2011

表紙/木管五重奏団 ウィンド アンサンブル・ボロゴ

真狩村でのワークショップの様子

[文化の宅配便事業]

撮影協力:真狩村立御保内小学校

CONTENTS

02 Stage
「ぐるぐる、しない」

04 インタビュー
山本 郁実
(木管五重奏団 ウィンド アンサンブル・ボロゴ 代表)

06 **特集**
「アートゼミ事業」特別講座
コミュニケーション/
表現教育へのアプローチ

08 北海道の食 [第4回]
牛乳～食の豊かさをひろげる可能性～

10 地域からのお便り
・誰にでもわかる、楽しいバリエ
・コミュニケーション教育・アウトリーチ事業(南富良野町)

12 この街この人 [第15回]
羽幌町

14 アートギャラリー [第19回]
高橋 喜代史 (現代美術家)

15 Information

「北のとびら」は、全道の文化ホール、文化施設などで
ご自由にお持ちいただけます。
※定期的に購読をご希望の場合、当財団へお問い合わせください。



資源の保護と環境へ配慮し、本紙には古紙再生紙、
インクは大豆油インキを使用しています。

取材・文/對馬 千恵
写真/西山 大介

脚本・演出／納谷真大

出演／武田晋 今井香織 杉野圭志 林千賀子 小島達子 藤谷真由美 児玉由貴 小林エレキ 納谷真大

「ぐるぐる」悩むその先の答えを サスペンスと笑いで描く

主人公は、「負けずぎらいで頑固者で、負けっぱなし」のアラサーの女子、高村ミヤコ。念願だった喫茶カルフルの店長になり、ようやく人生の「ぐるぐる」から抜け出したかのようにみえました。しかしミヤコはある日突然、失踪してしまいます。その理由は、常連客としてお店に現れたカメランとの出会い。もしも恋人が犯罪者だったら、しかも、その人の子どもを身ごもってしまったら。ミヤコは新たな「ぐるぐる」の中で悩み考え、答えを出していきます。

シリアスながらも、コミカルな笑いを絶妙に交えた、サスペンスストーリー。現代社会の誰もが犯すかもしれない犯罪心理をからめながら、逃避と葛藤の中で悩む主人公の姿が描かれていました。

この作品は、平成20年度の「ぐるぐる地獄」、21年度の「ぐるぐるぐる」に続きファイナルとなる3作目。舞台芸術の振

興を目指して、北海道などが行っている北海道舞台塾の事業の一環で、3カ年をかけたプロジェクトの集大成でした。全3作の脚本・演出を担当したのは、富良野から札幌に活動の拠点を移してきた納谷真大。生き生きとした出演者のテンションに、劇場全体が巻き込まれ、充実した公演として終了しました。



写真／高橋 亮己

■北海道舞台塾について

北海道舞台塾実行委員会は、北海道、北海道教育委員会、札幌市、(財)北海道文化財団及び舞台芸術関係団体等により組織され、北海道における舞台芸術の振興を図ることを目的として、平成10年度から各種事業を展開しています。

今年度は、より多くの方々に楽しんでいただける作品づくりに取り組んできた3カ年事業の集大成として、平成20年度の「ぐるぐる地獄」、平成21年度の「ぐるぐるぐる」に続く、演劇作品を公演しました。

- ・先進的創造活動の推進：道内の舞台関係者が制作する新たな舞台作品の公演等の提供
- ・地域創造活動の推進：地域に根ざした優れた舞台作品の選定と交流公演



平成20年度
「ぐるぐる地獄」

下川町、深川市、札幌市、壮瞥町、
岩内町、新冠町、大樹町

平成21年度
「ぐるぐるぐる
—その交差する点で—」
札幌市、浦河町、岩見沢市





木管五重奏団 ウィンドアンサンブル・ポロゴ 代表

山本 郁実

木管五重奏の調べが

みんなの町にやってくる

女性5人の木管楽器奏者で編成されている「ウィンドアンサンブル・ポロゴ」は、そのあたたかく優雅な音色と、ユニークなワークショップが好評を得て、道内各地の小・中学校などへ出向いています。彼女たちならではの活動と、その魅力についてお話を伺いました。

ポロゴ風ワークショップのつくりかた

木管楽器って、とっても素朴な音をだすんです。5つの楽器が異なる音色を持っていて、それぞれの個性を活かしたソロ演奏もプログラムしているの、聞いている方も楽しめる工夫をしています。

木管五重奏を説明する時に、私たちはケーキにたとえていたこともあるんです。ファゴットが土台のスポンジで、フルート、オーボエ、クラリネットがケーキの上のデコ

レーション部分、そして間をつなぐ生クリームのが役割ホルンだと。それぞれ仕組みが違う楽器なので、吹くタイミングもそれぞれなのですが、それがひとつの呼吸になれた瞬間は、アンサンブルとしてほんとうにいい気持ちです。

ポロゴを結成したのは、青森県内でおこなわれた、アウトリーチ事業に参加し、数ヶ所の学校などで演奏したのがきっかけだったのです。木管五重奏の魅力を、どうしたら子どもたちに興味を持ってもらえるかと、5人で知恵を出しあっ

て、工夫しながらでき上がったのが、「文化の宅配便」でのワークショップスタイルです。

ストロークで、オーボエやファゴットのリード部分を再現して、実際に子どもたちに音を出してもらったり、ホルンを解体すると、ファゴットとどちらが長い予想するクイズを出したり。こんな仕組みの楽器からこんな音が出るんだと、楽器ひとつひとつの音色に興味を持ってもらえるんじゃないかと思っています。メンバーには、北海道教育大学出身者や、小学校で音楽の先生のアシス

タントをしていた人もいるので、子どもたちにおもしろいと思ってもらう工夫を考えるのはわりと得意なんです。

お互いに楽しめる音楽にしたい

今日のように、ホールがない、小さな町の学校に行く事もあります。小さい規模の演奏会やワークショップは、参加者の表情がダイレクトにわかるところがいいと思います。

楽しんでるかどうかは、顔を見ればすぐわかるので、つい「子どもたちの喜んだ顔が

みたい！」と、私たちも地域の特色やご要望に合わせているような取り組みもオーダーメイドでおこなっています。

たとえば、担当の方から「教科書に載っている教材と一緒にやってみよう」とか、「授業でヴィヴァルディの『春』をリーダーでやったので、ワークショップに取り入れて欲しい」といったお話を聞いて、どのようにしたら楽しんでもらえるかを5人で考えていきます。学校や地域の気持ちも汲み取りたいですし、参加した方々にしっかりと届く方法でおこな



ワークショップ
(真狩村立御保内小学校)



一般公演(真狩村公民館)



ワークショップ(真狩村立真狩中学校)



木管五重奏団 ウィンド アンサンブル・ポロゴ
代表 山本 郁実

'07年に、札幌在住の女性木管楽器奏者により結成された木管五重奏団ウィンド アンサンブル・ポロゴの代表を'10年から務める。クラリネットを担当。ポロゴは北海道文化財団による「文化の宅配便」事業で、小・中学校などへのアウトリーチ活動の他、ホールでのコンサートを行うなど幅広い活動を展開中です。



文化の宅配便

道内の各地域において、芸術鑑賞など広く文化に接する機会を拡充していくため、地域文化の拠点となる公立文化ホール等の施設が無いなど、鑑賞環境が整備されていない市町村において、鑑賞公演とともにレクチャーやワークショップ等を組み合わせた事業です。

平成23年度 ポロゴ 開催予定地

・初山別村 ・喜茂別町 ・せたな町 ・月形町

アートシアター鑑賞事業

道内外で活動するアーティストによる舞台芸術(音楽、演劇、舞踊等)の公演です。北海道文化財団が選定した上演目(上演予定リスト)や、各市町村等が連携して企画したネットワーク型公演の上演等を共催します。

平成23年度 ポロゴ 開催予定地

・奈井江町 ・浜頓別町



いたいという、私たちのスタンスがあるので、そのちょうどいいバランスを探っていくのも、ワークショップ・プログラムづくりの楽しいプロセスです。

また、学校側では、たくさん子どもたちに、生の楽器の音を体験できる機会をつくろうと、200人ぐらいのワークショップを希望される時もあります。ですが、その規模だと楽器の紹介をしても、一番後ろの子どもは見えなくて、つ

まらなくなってしまう。私たちは、全員に楽しんでもらいたいと思うので、その時は、低学年と高学年の100人ずつに分けて、それぞれにあった内容を提案しました。

私たちが一方的にレクチャーするのではなく、伝わる環境や伝え方を考え、お互いに楽しめる形のほうが、開催側も私たちもよかったと思えることが多いです。

「大きな子ども」が「小さな子ども」たちに「きくわく」

子どもって、ほんとうに感性が柔軟で自由です。大人が持

つような先人観がないので、いつも「は」とさせられます。演奏する曲を選ぶ時など、最初は「誰もが知っている親しみやすい曲を」と思っていたのですが、たまたまその地域の子どもたちにとっては、どれもが聞いたことのない曲なんです。大人が考えるクラシックの枠組みなんて気にする必要がなく、木管五重奏ならではの、あまり知られていない曲でも、私たち自身がその曲を本当にいいと思えば、「生懸命取り組んでいれば、ちゃんと反応を示してもらえます。

変に子ども扱いして、歩みよめる必要はないんです。大事な

のは、私たちが演奏を心から楽しむ姿。ポロゴのみんなは、そういう意味では、楽しいことを本気でやっている「大きな子ども」なんだと思います(笑)。

私たち5人は、たまたま音楽・木管楽器を好きになり、縁があつてポロゴでの演奏活動をしています。ですが、続ける事である程度の地域に行き、多方面の方たちとお会いすることができて、とてもしあわせです。子どもたちには、こんな大人がいってもいいんだってことを、知っ

て欲しいです。大人になっても、好きなことを続けていければ、こんなに楽しく生きられるんだと。そうすれば、子どもたちの将来の選択肢も広がると思います。

子どもたちのためにも、自分たちのためにも、ポロゴは今後も、心の底から楽しい活動を続けていきたいと思っています。

コミュニケーション／表現教育へのアプローチ

今回の特別講座は、平成22年度から始まった、文部科学省の「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」に、実際に取り組まれた事例の報告をとおして、この事業に関わる学校関係者やアーティスト、その橋渡しをするコーディネーターの相互理解のきっかけづくりの場として開催しました。そこで実際に取り組まれた道内5校の内、3校の事例をご紹介します。



・平成23年1月14日(金) ・ホテルライフオート札幌 ・参加者数:76名

現在子どもたちは変化の激しい社会で生きていかなければなりません。「社会の変化に対応できる」「自ら考えて行動できる」「力であり、「生きる力」にあたるものです。

このような状況で、教室で椅子に座って受ける授業のみならず、実際に体を動かして五感を感じる、例えば演劇やダンスなどを用いて、コミュニケーション能力を育む教育ができないかと考え、今年度から開始しました。

ここで重視していることは、NPO法人や劇場や劇団など、芸術表現のノウハウを持っているガイド役と、学校が連携して実施することです。外部の方に任せきりではなく、学校の先生も協力しながら体験的に活動していく。それがコミュニケーション能力の育成を目指すのです。そのため、総合的な学習の時間や、教育課程に位置づけることとなります。

この内容の中心であるワークショップは、子どもたち自ら参加し、体験することを目的としています。今年度は、45都道府県、1900自治体、292校で取り組んでいます。内訳は小学校が6割、中学校が2割、その他高等学校や支援学校などです。分野別では、約半分が演劇、約2

割が伝統芸能です。その他にもダンス、大衆芸能、メディア表現などもあります。教科別でもっとも多いのは総合的な学習の時間ですが、音楽や国語、特別活動などもあります。団体との連携状況は、NPO法人と劇団が多いです。

平成23年度は、事業名は変わりますが、本年度の内容を踏襲しながら、新たなメニューを増やして実施できるよう、検討しています。今年度は、学校が直接申請する方法でした。来年度は、アーティストと学校を繋ぐコーディネーターにお手伝いいただき、アーティストの派遣を学校に働きかける方法を考えています。(文部科学省からの「概要説明」より)

事例1 音更町

音更町立木野東小学校



▲音更町立木野東小学校 校長 狩野 信也

▼漆 崇博
アート・イン・スクールを、道内各地で実施するAISプランニング代表



狩野 今回は、4年生120人を対象に、主に社会科と総合学習の時間で実施し、全12回47時間を使って、社会科見学での体

験をもとに、学習発表会でドラマ形式で発表するというプログラムでした。実施に携わった演

出家の西田豊子先生には、演劇指導ではなく、発表の手助けをするためのワークショップをおこなっていただきました。表現の幅を広げるための言葉や、声の出し方などをレクチャーし、子どもたちは人に伝える方法から、みんなので一つのテーマの劇をつくるための、コミュニケーションづくりに取り組みました。発表が目的ではなく、自分たちの体験から創造し、発信するまでのプロセスに、コミュニケーションを育てるための要素が盛り込まれています。

このようなことが実現できたのは、学校側との十分な意思の疎通が前提にあったからといえます。西田先生とは、北海道と開催市町村などによる、「北海道舞台台塾」音更実行委員会主催した、「ドラマの授業を一緒に取り組んだ」というつながりがありました。ドラマ教育というのは、子どもの心の動きや、感動を引き出すことを主軸に置く教育プログラムです。

ドラマ教育は、相互コミュニケーションを非常に大切にしています。「劇的瞬間を作り出すことができる」要素があり、私の学校の教育目標「豊かな自尊心、愛他心(進んで学び、思いや

りのある子、元気ががんばる子)を育むことと合致するのです。

特に総合的な学習の時間については、「問題解決や探究活動の過程においては、他者と協同して問題を解決しようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるようにすること」。これがドラマの手法と合致するのです。「学校教育が目指す目標」と「木野東小学校の目指す子ども像」と、「学習指導要領の目指すドラマ教育」の三者が一致します。楽しかつた体験だけで終わらせないためには、きちんとした学習指導目標、あるいは芸術体験を通じて、何が本質なのか、ということを理解することです。

漆 私からは、自分が実施している「アーティスト・イン・スクール」について紹介します。これは本来、コミュニケーション事業を目的としたものではないので、学校でアートと取り組む際の参考例にしたいな

「アーティスト・イン・スクール」とは、カリキュラムへの参画を前提としないもので、アーティストを転校生として迎え入れよう、というのが特徴です。子どもたちとアーティストとの距離を縮める、それによって活きた交流をすること



が目的です。

また、少子化の影響もあつて、余剰教室、空き教室が増えています。そこを、アトリエとして開放し、子どもたちや先生、地域の方々と交流しよう、というねらいもあります。

アーティストはその地域に2〜3週間滞在し、休み時間や放課後、週末や祝祭日を交流時間として利用しています。大前提として、「学校とアートがつながる地域の絆」をテーマにしています。学校をうまく活用することで、学校を地域の人々の拠り所にしよという思いを込めて実施しています。これは、児童の創造的な取り組みに対する意欲を向上させるきっかけになるのではないかと、さらに、地域の人たちお互いの交流の機会を創出したいということなのです。

狩野 アーティストが学校に入ることによって、間違いなく、子どもたちのコミュニケーション能力は変わってきます。これらの取り組みが、いっそう根づいていくために、コーディネートナーの存在が重要ですね。なぜなら、学校には教育目標があるからです。「学校」と「アート」という、2つの世界、両者を知るコーディネートナーの存在により、アーティストが果たす役割、教材開発の視点、アーティストの専門性を活かす教

育効果について、実践検証ができてやすくなるのです。

事例2 士別市

士別市立朝日中学校



▲士別市教育委員会 教育長 安川 登志男

▼漢 幸雄
士別市教育委員会主幹。あさひサンライズホールの立ち上げから関わり、積極的にアウトリーチ事業のプロデュースを担当



安川・漢

士別市では、道内で活躍するNPO法人、劇団主宰者の方々などを招いて実施しました。その背景には、合併契機に「あさひサンライズホール」が中心となりおこなってきた、アウトリーチによるワークショップの実施が下地となつています。市内全17小・中学校で、年間というとうと、50〜80回おこなつており、その中には、1年間アーティストに住んでいただき、地域や学校との関係をつくりながら、一本の芝居をつくるということもありました。それらを通じてわかったのは、学校の先生は、教員養成のプロセスの中に、芸術に触れる機会が別段無いということでした。つまり、アーツ・イン・エデュケーションについては、お

そらく考えたことも無いと思えます。ましてダンサーや演出家、音楽家と交流する経験はほとんど無いわけですね。だからこそ、その過程をつくれるワークショップを、アウトリーチしていききたいのです。

ただ、熱意のある先生が転勤したとたんにノウハウがなくなることもあるので、きちんと継続されるシステムをつくることです。そのためには、まず先生方に知ってもらおう、見てもらう、経験してもらおうということが大事です。

課題は、学校とアーティスト、劇場の三者がきちんとトライアングルを組み、どの角度から見ても、同じ距離で子どもを見ることができるとどうかなと思えます。この活動を通して

平成23年度 児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験

(「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」)

[文部科学省応募要領(案)より抜粋]

趣旨

本事業は、児童生徒に対し、芸術家による表現手法を用いた計画的・継続的なワークショップ等の実技指導を実施することにより、芸術を愛する心を育て、豊かな情操を養うとともに、コミュニケーション能力の育成を図るものです。

対象

全国の国立、公立及び私立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校(以下「小・中・高等学校等」という。)の児童生徒

事業内容

本事業を実施する小・中・高等学校等(以下「開催校」という。)に対し、特定非営利法人等国内の法人、公共や民間の劇場、又は芸術団体等に所属又は関係する芸術家や劇団員等(以下「芸術家等」という。)を派遣し、開催校の担当教師と芸術家等が連携を図り、児童生徒を対象に、芸術のもつ表現手法を用いた、集団による創作過程を含む、計画的・継続的なワークショップ等の実技指導の実施を通じて児童生徒のコミュニケーション能力の育成を図ります。

て、子どもが劇的に変わっていくのを見てしまいました。その変わり方の凄さに、アートの力を見たのです。その変化にしっかりと向き合っていくのがアーティスト、そこに先生が入って、子どもたちを大切に見つめることができればいいなと思つていきます。

事例3 南富良野町

南富良野町立下金山小学校



南富良野町立下金山小学校 校長 暮地 本章

暮地 本章 南富良野町立下金山小学校では、総合的な学習の時間において、全6回にわたつておこなわれました。

講師は、富良野演劇工場の工場長である、太田竜介さんを招き、セリフづくりから始まる演劇体験を通して、言葉と身体で表現する力をつけるプログラムが組まれました。当校は、児童数が8名という、少人数校であることから、今回の取り組みで、コミュニケーション能力の向上に力を入れました。

また、児童の成長と共に、教員も演劇を通じた能力育成の手法を学び、指導面で活かそうとする発見もありました。

まとめとして行われた発表会には、地域住民も積極的に参加し、住民と学校と児童が結びつけられる新たな行事として、成功させることができました。

豊かな食に恵まれた北海道。しかし、「北海道の食」はさまざまな物語をへて今にいたっています。食の地産地消を通じて見えてくる北海道の食の歴史や生活文化を、全4回にわたってご紹介します。

第4回 牛乳～食の豊かさをひろげる可能性～

北海道の開拓の歩みと酪農の歴史は深くつながって発展してきました。

生産者の想いが込められた牛乳は、バターやクリームなど、さまざまな形に姿を変えて、日々の食卓に彩をそえています。

時代にあった原料として柔軟に姿を変えていく、牛乳の可能性についてご紹介します。



ジャンボ

別海牛乳をきっかけに 町の絆を深める

牛

乳

日本一の生乳生産を産出する酪農の地、別海町。乳牛数は11万頭以上を誇っています。そこで、町をより活性化させたいと、別海町の青年らが中心となって考えた町おこしのメニューが、ジョッキで飲む「別海ジャンボ牛乳」です。別海町の生乳は、摩周湖の伏流水を飲んで育った牛から搾っています。加工せず、そのまま飲むほうが、より魅力を伝えられると考え、「牛乳」の味わいにこだわりました。ジョッキ牛乳は限定された農家の「脂肪分が多い牛乳」だけが厳選され、「500mlの冷やしたジョッキ」に入れるなどの条件をつけ、町内の飲食店で提供されています。さらに、牛乳に合う食べ物も楽しんでもらおうと、別海町・野付産の肉厚のジャンボホタテをつかった「ホタテ

バーガー」も開発。ホタテを春巻きの皮で包んで揚げることで、パリパリした食感が楽しめ、3種類の手づくりソースを選んでかけるバーガーが生まれました。開発には、漁業関係者や飲食店関係者、農家の人々も参加し、町が一体となって完成にこぎつけました。

10年には、牛乳とバーガーのセットが、美瑛町でおこなわれた「新ご当地グルメグランプリ」において、見事、北海道初代グランプリを獲得し、それ以来、このセットを求めて別海町に訪れる観光客の数は倍増したといえます。

牛乳から始まった町おこしは、酪農だけでなく、町全体を結びつかせ、あらたな活気をつくり出そうとしています。



チーズ

生産者から発信する 手づくりのおいしさ

北海道の酪農で、初期から取り組んでいた八雲町。牛の飼育に適した冷涼さに恵まれ、北海道の酪農郷として発展してきました。

その八雲町で、「農家に自慢の漬物があるように、酪農家にも自慢のチーズがあってもいい」を合言葉に、酪農家の女性が集まって活動を続けているのが「八雲ハンドメイドの会」です。

自分たちの牛乳を飲む以外にも楽しむ方法はないかと、'92年に設立されて以来、農閑期を利用して、先進地研修や講師の招へいを重ねながら、活動を続けてきました。衛生管理などの厳しいチェックを受けた、良質の牛乳だけであつたチーズは、次第に地域住民から人気を得て、現在では各地のイベントなどでも販売をおこなっています。

また同時に「手作りチーズを楽しむ」



む会」を開催。地元住民を対象に、地元食材のおいしさやチーズづくりのおもしろさ、酪農の魅力を伝える活動もおこなっており、メンバーに酪農家以外の町民も加わり始めました。

こうした活動が認められ、地域の特産物を活かし、地域づくりに貢献している女性グループに送られる「食アメリティコンテスト」の農林水産大臣賞を'07年に受賞しました。4000ℓの牛乳から、わずか1割ほどしかつくることのできないチーズ。八雲町のチーズには、牛を育てるところから始まる、生産者たちの想いが込められています。

菓子

ミルクのお菓子から 新しい酪農の可能性をひらく

全国的に人気の高い北海道スイーツ。砂糖・小麦・乳製品など良質の材料が手に入りやすい北海道は、洋菓子がつくりやすく、バター・クリーム・ヨーグルトなどを使った、さまざまなお菓子がつくられています。

酪農家の育成だけでなく、食品流通にも通じた学科を設置している酪農学園大学では、牛乳を使ったデザートのレストラン、「牛乳類を使ったお菓子レシピアのアイデア大募集」を、'06年から毎年おこなっています。その背景には、消費者の牛乳離れなどによる消費の低迷を改善し、より牛乳の消費拡大をはかると

ともに、北海道の良質な食資源を、道内で商品化し、付加価値をつけ、道外に発信していくというねらいがあります。

商品開発と流通を視野に入れた同コンテストは、今回で5回目。全国64校から542件の応募があり、酪農学園および地方独立行政法人北海道総合研究機構食品加工研究センター、製造・販売するコンビニエンスストアの担当者によって審査がおこなわれました。

生クリームとチーズのムースに、ゴマをトッピングし、新しい風味が好評を得た、「うしくんのチーズムース」や、牛をイメージした白と黒の北海道産じゃがいものクリームを使った「牛さんのじゃがいも〜ンブラン」などが入賞。

それらの作品は、主に道内で展開しているコンビニエンスストアで、実際に4週間の限定販売され、販売1週間の売り上げは前年比200%になるなど反響を呼びました。

おいしい牛乳づくりからその一歩先へ。酪農の灯りを次の世代につないでいく活動が注目を浴びています。





地域からのお便り

地域で行われているユニークな文化活動の紹介や、地域のこんな活動が知りたい等の声をお届けしています。

本別町 文化の宅配便事業

誰にでもわかる、楽しいバレエ

ユニットリトルバレエ本別公演実行委員会 代表 小川早苗

「本別町で、北海道文化財団の『ユニット・リトルバレエ』公演ができないかな？」

一昨年の事業計画提出時に町内に声をかけ、ついに実現出来た内容をお伝えしようと思います。

実施の決定を受け、町内の小・中学生の保護者数名と有志で実行委員会をつくり、町内でも初めてではないかと思う、「クラシック・バレエの体験講座&公演」に向けて動き出しました。

11月の開催にむけて、各実行委員が手分けをして、町内全ての学校・保育園・幼稚園の子どもたちにチラシを配布し、各公共施設や町内のお店などへはポスターを掲示。さらに、町広報紙、新聞各社などでのPR効果が、口コミ中心に話題は広がりました。

公演では、小さな子どもたちからご年配の方々まで、広く楽しむことができました。なぜかということ、パントマイムやクイズコーナーがあり、子どもたちが積極的に出演者の前に出ていって挑戦し、会場内は大盛り上がり。ダン

サーが馴染みのある曲を踊っている時には、誰もが美しい姿にうっとりし、釘付けになってしまいました。

さらに、日頃のレッスン風景や有名な作品場面の振付の紹介と説明。さらには創作や衣装展示など多くのバリエーションがあり、プログラムの最後まで「あっ」というまでした。

はじめは、会場へ来ることを体を恥ずかしがっていた男性(オジサンですが^^)も、「すごく良かった」と声をかけていただき、嬉しかったのと同時に、今後、もっとバレエ、舞台芸術を身近に感じてもらえるようにしていきたいと思いました。

「クラシックバレエ」による「文化の宅配便」を体験し、その趣旨を私たちは文化財団、そして出演者の方々から聞き及んでいた、「誰もが気軽に舞台芸術に参加でき、若い世代の舞台芸術体験を増やし、次世代が実体験する環境を整える一助となれば」という願いを再認識しました。

さらに、アートの力で「地域コミュニティ」で活動する、さまざまな団体や企業との連携や

協働体制を整え、まちづくりに貢献できれば」という想いを、この取り組みで一つの形が出来たのではないかと思います。

もはや、「バレエなど、お高くとまったような舞台芸術は、関心がない人には、別世界」というような話は、ここではもはや成り立ちません。本別町の人口は、約8千5百人です。だからこそ、このプログラムを通して、ただ美しい&かわいらしいバレエだけではなく、紙芝居やクイズなどを盛り込んだ内容もあり、タイトル通り「誰にでもわかる楽しいバレエ」という今回の入口から、舞台芸術の世界に大きな関心を寄せることができたのではないかと感じました。

来場したお客様、子どもたち、実行委員をはじめとして、誰もが得がたい体験をしたことは間違いありません。「みなさんの地域でもやってみませんか、いいですよ！」



本別町 honbetsu

北海道文化財団 自主事業 実施レポート

北海道舞台塾 北の元気舞台 地域間交流

【公演名】 浜益小劇場江別公演
「るっつって何よお？」

【実施日】 平成23年2月6日(日)

【場所】 江別市コミュニティセンター

【参加者】 167名

【公演名】 琴似フラグステーション土別公演
「旗ヲ出スヘカラス」

【実施日】 平成23年2月19日(土)

【場所】 あさひサンライズホール

【参加者】 212名

文化の宅配便

【名寄市】

【公演名】 金子竜太郎(和太鼓公演)

【実施日】 ワークショップ・平成23年1月28日(金)公演・平成23年1月29日(土)

【場所】 名寄市文化センター・名寄市民会館

【参加者】 ワークショップ25名/公演200名

【真狩村】

【公演名】 木管五重奏団ウィンドアンサンブルポロコ

【実施日】 平成23年2月1日(火)
(中学校公演、ワークショップ①、一般公演)
平成23年2月2日(水)
(小学校公演、ワークショップ②)

【場所】 真狩村立真狩中学校(ワークショップ①)
真狩村公民館(一般公演)
真狩村立御保内小学校(ワークショップ②)

【参加者】 中学校公演、ワークショップ①26名
一般公演90名
小学校公演、ワークショップ②16名



コミュニケーション教育・アウトリーチ事業

実演芸術家などのアーティストが、学校活動の一環や、公共的な施設を訪問して芸術普及活動を行う、現場出張型の事業を紹介します。

南富良野・演劇
サンタクローズを信じてる？

南富良野町立下金山小学校の1年生〜5年生まで、8人の子どもたちとおこなった6日間の「芝居づくり体験」は、自己紹介から始めました。



まず、僕が20分くらいかけて自己紹介をしました。血液型から趣味や家族のことなど、なるべく興味をもってもらえるように、詳しく話しました。そして、どれだけ子どもたちが記憶したかを質問しました。これは、9月から始まったワークショップの6日間、毎日質問しました。自分のことを伝えること、そして知るこ

と、これがコミュニケーションの第一歩です。

次に子どもたちにも自己紹介をしてもらおうのですが、その都度、自己紹介用の紙を渡し、「将来の夢」、「好きな言葉」、「悩み」などを書いてもらいました。

そして、それぞれが発表した後に、みんなですべての「悩み」について解決策を話し合いました。その時のそれぞれの意見を僕がメモをして、そのままセリフにし、脚本にしました。



既成の脚本を使ってセリフを覚えて演じるより、自分に

ついて考え、自分自身を演じる方が、子どもたち自身に気持ちが入り、リアルな演技ができるからです。さらに、僕が脚本を書くよりずっと自分たちに近い、小学生らしい面白いセリフがたくさん出てきました。

「サンタクローズ」を信じている子どもが6人、信じていない子どもが2人いて、それを脚本に取り入れることにしました。

最後に、日頃から授業で練習している歌や合奏などを演劇的な効果として取り入れ、全員でつくった脚本が完成しました。

僕は、表現に「正解」や「規則」の無い事を伝えるだけで、子どもたちが自由に表現できるように導くだけでした。

このようなワークショップを通じて、より一層、僕や道内に在住するアーティストたちが、地域の人たちや子どもたちと、より良い関係性を築き上げられればと願っています。



富良野演劇工場 工場長 太田 竜介

岡山県出身、富良野塾10期生。脚本家志望として入塾。富良野塾の全国・海外ツアーの音響を担当。'00年にNPO法人ふらの演劇工房に舞台技術スタッフとして入社。'02年、富良野演劇工場長に就任。市民劇の脚本・演出や、各種ワークショップなどもおこなっている。

南富良野町
minamifurano



アルテポルト（アートで賑わう港 ミニトーク

「アルテポルト」にて、1月に展示作家11名によるお正月顔見せ展、2月にその月の展示作家によるミニトークを行いました。

（1月）お正月顔見せ展（平成23年度出品作家11名）

（2月）

展示作家 藤本和彦

実施日 ミニトーク平成23年2月9日（水）

入場者 21名

若手芸術家発表事業「夢の煙シリーズ」
2台のヴァイオリンとピアノによるコンサート

昨年夏PMFのアカデミー生として、コンサート・マスターを務めたヴァイオリニスト・小林佳奈さんをはじめとする、若手演奏家によるクラシックの名曲や、映画音楽などの演奏会を行いました。

【石狩市】
実施日 平成22年12月15日（水）

場所 石狩アイトウーム

入場者 52名

【壮瞥町】
実施日 平成22年12月21日（火）

場所 壮瞥町地域交流センター山美湖

入場者 137名

【新十津川町】
実施日 平成23年2月7日（月）

場所 新十津川町ゆめりあホール

入場者 100名

【北斗市】
実施日 平成23年2月9日（水）

場所 北斗市総合文化センター「かなでる」

入場者 110名

【苫前町】
実施日 平成23年2月20日（日）

場所 苫前町公民館講堂

入場者 120名

この街 この人 羽幌町

人から人へ、そして一人から大勢へ。
生活シーンでのアートの可能性は、
人を通して無限に広がっていきます。
地域の文化力を支えている、さまざまな人たちを通して、
道内各地の活動を紹介します。

★羽幌町

Haboro

<http://www.town.haboro.hokkaido.jp>



炭鉱ガイドマップや、炭鉱跡の写真をDVD化した「炭鉱遺産 羽幌炭鉱」も発行している工藤さん。羽幌炭鉱跡は、保護や修復の予定がたっており、このままだとあと十数年もすれば、見る事もできなくなってしまう状況とか。「少しでも形に残せれば」と、工藤さんは資料の制作に励んでいます。



羽幌町文化財調査委員

工藤 俊也さん

Toshiya Kudo

いまでも残る羽幌炭鉱の記憶を語り継ぐ

「1954年に札幌市中央区大通に建てられた羽幌炭鉱の札幌本社ビルは、「大五ビルヂング」として、今も使われ続けているんですよ」

かつて1万2千人もの人々が暮らしていた羽幌炭鉱。しかし、石炭から石油へのエネルギー政策の転換により、70年にその幕を閉じた。現在、廃墟として形を留める三つの炭鉱跡をタクシーで巡る、「三炭周遊観光」の案内役を務めているのが、工藤さんです。

「天売・焼尻島以外の観光場所を」というお客さまからの要望があり、炭鉱跡を案内していると提案したのが始まりです。

4歳まで炭鉱町で育った記憶を辿りながら、さまざまな資料を調べつつ、5年間で50組以上をガイドしてきました。

「炭鉱は羽幌を元気づかせるエネルギーでした。その跡地を訪れることで、羽幌に活気があった時代をしっかりと胸に刻むことができます。わたしたちに、再び元気を与える活力が、まだここには残っているんです」

昨年5月に開催されたバスツアーには、町内外から40名以上が参加。工藤さんは、これからも町の基盤となった歴史を伝える活動を続けていきます。

羽幌町加賀獅子保存会 会長

九谷 一司さん

Kazushi Kutani

町の人々の心をつなぐ 伝統芸能を伝えていきたい



九谷さんが会長を務める「加賀獅子保存会」は、戦後途絶えてしまった加賀獅子の舞いを復活させるため、74年に発足されました。久谷さんはその立ち上げから参加し、会を盛り立ててきた第一人者です。羽幌神社祭でおこなわれる加賀獅子は、獅子頭ししがしらと蚊帳かやと呼ばれる胴に、20人ほどが入る大獅子の舞い。その他にも獅子の前を歩く棒振り、笛や太鼓などもあり、総勢80名以上で行われる、賑やかな伝統芸能です。

「町の子どもたちは、小さい頃から加賀獅子を見ているので、将来自分はどこをやるのか、と楽しみにしています」

昨年11月、保存会はその活動歴を認められ、北海道文化団体協議会奨励賞を受賞しました。

「舞うのを楽しみに、わざわざ祭りの時期に帰郷する若者がたくさんいます。彼らのためにも、続けていきたいですね」

町を離れても、帰る場所がある。加賀獅子は町の人々の心をつないでいきます。



羽幌神社の神様は女性なので、神様が嫉妬するからと、長いあいだ町の女性は担げなかったという羽幌神輿。艶龍会で使われている神輿は、寸志や寄付を10年間貯めてやっと手に入れたもの。2日間にわたる羽幌神社祭では、女神輿も、朝から夕方まで休むことなく町中を練り歩きます。



羽幌 艶龍会 会長

榎原 さゆりさん
Sayuri Sakakibara



親子三代で担ぎたい 町の一体感をうみだす女神輿

150 kgもある神輿を女性だけで担ぎ、町内を練り歩く羽幌名物「女神輿」。100名以上の会員を持つ女神輿の会「羽幌艶龍会」は、'88年に立ち上げられ、榎原さんはその当初から会長をつとめてきました。

「神輿を担ぐには、足さばきが肝心。みんなで息を合わせるため、お祭りの前は猛練習です。この一体感が楽しくて、お産で休んでいた人も、翌年にはまた担ぎにくるんですよ」

何もわからないところから始めた女神輿でしたが、各地のお祭りに参加するなど、実跡や練習を重ね、今では町外から教わりに来る人もいます。

「浅草の三社祭では、ご年配の女性でも率先して神輿を担ぐんです。羽幌でもそんな元気な人を増やしたいし、おばあちゃん、娘孫と、三世代で担げるようにしていきたいですね」と町一番の祭女はいつも元気です。

羽幌町ゆかりの文化の担い手たち

[画家・イラストレーター]
おおた慶文さん

淡く繊細な色あいの水彩画で、少女や子どもを叙情的に描き、全国で根強い人気を誇る画家。'95年に全国5会場で開催した原画展では、延べ6万人の観客動員を記録し、現在も活動の場を広げています。

[漫画家]
椎名 軽穂さん

月刊少女漫画雑誌に16歳でデビュー。10代の女子学生の恋や、友情を描いた作品などを発表し、'05年から始めた長期連載「君に届け」は、'10年に映画化されました。羽幌町中央公民館で、6日間にわたって開催された「君に届け展」も好評を博し、地元からも愛される作品を描き続けています。

[銅版画家]
高野 玲子さん

猫の銅版画を得意とし、「月の夜の猫たち」「猫記念日」などの銅版画集のほか、「注文の多い料理店」などの絵本の挿絵も多数制作。'89年にはドイツワインメーカーのラベルを手がけるなど、活動は多岐にわたっています。

[講談師]
宝井 梅福さん

講談とは歴史的事件などを題材に、注釈を付けて語る話芸のこと。宝井琴梅さんに弟子入りし、'10年に真打に昇進しました。南極観測船「宗谷」を題材にした台本は、昭和の歴史を語り、聞く人々の心を打つ名演です。

[自然写真家]
寺沢 孝毅さん

羽幌町立天売小学校に教師として赴任し、退職後も海鳥の保護・調査活動をしながら自然写真を撮影。'99年に天売島海鳥情報センター「海の宇宙館」を開設し、生物の生息環境に目をむけた活動を続けています。

[書家]
中野 北溟さん

羽幌町焼尻島出身。漢詩・漢文以外の日本語の「近代詩文」を提唱した金子鷗亭に師事し、北海道にこだわった作品づくりを続けています。国内外からも高い評価を得ている、現代の日本書壇を代表する一人です。

[フォーク歌手]
みのや 雅彦さん

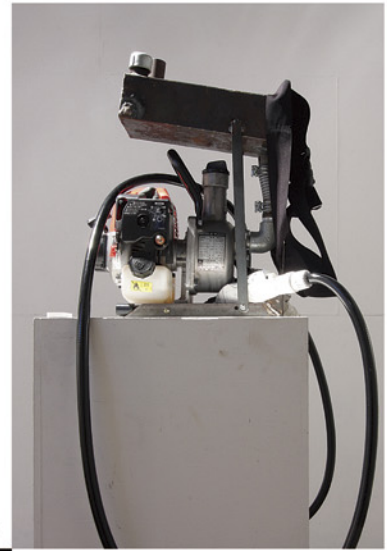
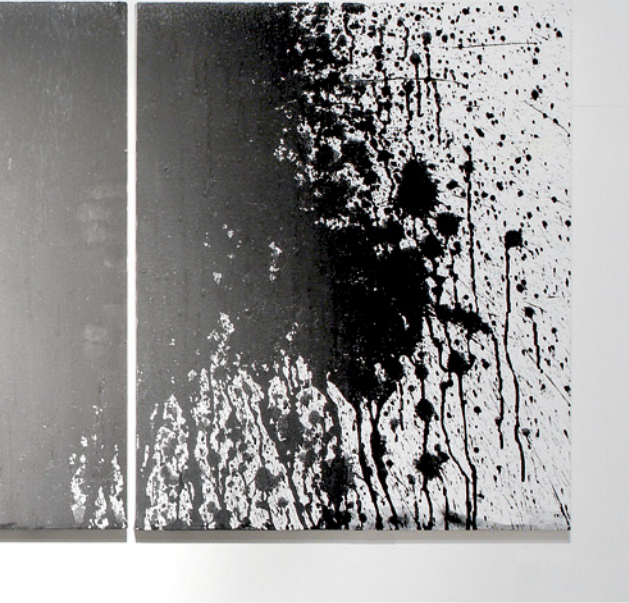
松山千春さんに影響をうけ、羽幌高等学校在学中にオーディションに参加。それをきっかけにラジオ番組などでの活躍を経てデビューしました。現在も、道内各地のイベントを中心に活躍しています。

「北のとびら」87号で誤りがありました。ここに深くお詫び申し上げます。
正しくは、「秋元 貢(九重部屋親方)さん 日本相撲協会巡業部長(2010年12月時点)」です。



加賀獅子の全長は約10m。町内の男性が中に入り、獅子頭を先頭に神輿のまわりをぐるぐるとまわります。加賀獅子は、石川県から伝えられた芸能ですが、獅子が神輿の上に登ろうと競り合う「練合」は、羽幌独特の風習なのだそう。「怪我がないよう、楽しい祭りになりたい」と丸谷さんは熱く語ります。





ビームサーベルエンジンパフォーマンスとビームサーベルエンジン



(CAI02)にて

私の主な作品は3つ。
オリジナルの筆を用いた墨
噴射パフォーマンスで、書的な
平面作品をつくる『筆シリーズ』。
擬音語があらわす様を、立体的な文字に具現化することで、
鑑賞者の頭の中にそれぞれの
音が生成される『擬音シリーズ』。
「日本文化の国際化」という
矛盾をテーマにした新シリーズ『日本シリーズ』。
それら3つのシリーズすべてに
通底するコンセプトは、『境界の視覚化』です。
東洋と西洋、立体・身体表現・平面、歴史と現代、具象と抽象、どちらでもあり、どちらでもない、そのような曖昧な境界を視覚化することで、現代の世界を投影するような作品を制作しています。
していますというか、それ
しかできません(笑)。(高橋)



現代美術家
高橋 喜代史
Takahashi Kiyoshi

妹背牛町出身。CAIアートスクール卒業。
2010年JRタワー「アートボックス」グランプリ受賞。ニュージーランドで個展、中国吉林省図門江彫刻公園に作品設置。2008年S-AIR AWARDを受賞し、北アイルランドで個展などを開催。

information 各種事業のご案内

アルテ ポルト (アートで賑う港)

「アルテ ポルト」では、その月の作家による作品展示を行います。

また、当該作家による「ミニトーク」も開催いたしますので、是非ご来場のうえ、作品をお楽しみください。

場所 北海道文化財団
アート スペース

時間 平日9:00~17:00

休館日 土・日・祝日



展示 スケジュール

3月 泉 修次
ミニ
トーク 3月9日(水)
18:30~19:00

4月 渡辺 貞之

5月

伊藤 光悦

6月

西田 陽二

7月

香取 正人

8月

松井 茂樹

9月

木村 富秋

10月

下沢 敏也

11月

渡辺 行夫

12月

國松 明日香

※「ミニトーク」の日時等、詳細はホームページをご覧ください。

文化情報ライブラリーのご案内

アート スペースの隣りに、文化や舞台芸術について、「読む」「聞く」「見る」ことのできる「文化情報ライブラリー」を運営しております。お気軽にご利用ください。



北のとびら

広告募集のご案内

(財)北海道文化財団の情報誌「北のとびら」(年4回/8,000部発行)では、裏表紙に広告スペースを設けています。

全道の市町村・文化ホール・文化施設・高等学校・銀行など、さらには国の機関、都府県・政令指定都市、文化振興財団など約1,800ヶ所に配付しています。貴社の企業広告媒体としていかがですか。

■掲載枠の仕様

(1)掲載スペース:最終16ページ(裏表紙)

(2)掲載サイズ:A4誌面サイズの

サイズ	最大設定枠数	左記のいずれかとなります。詳細については、ご希望の内容によりご相談させていただきます。
1/8	8枠	
1/4	4枠	
1/2	2枠	

(3)仕様:4色フルカラー

(4)掲載版下:貴社製作物又は既存版下(デジタルデータ)

定期購読のご案内

情報誌「北のとびら」(年4回発行)の定期購読をご希望の場合は、当財団へお問い合わせください。

(個人の方への送付の場合は、切手を負担していただいております)

静かに訴えかけてくるもの

強く反射してくるもの

生命からのささやきに敏感に耳をかたむけ

真摯に向かいあうアーティストの作品を紹介します



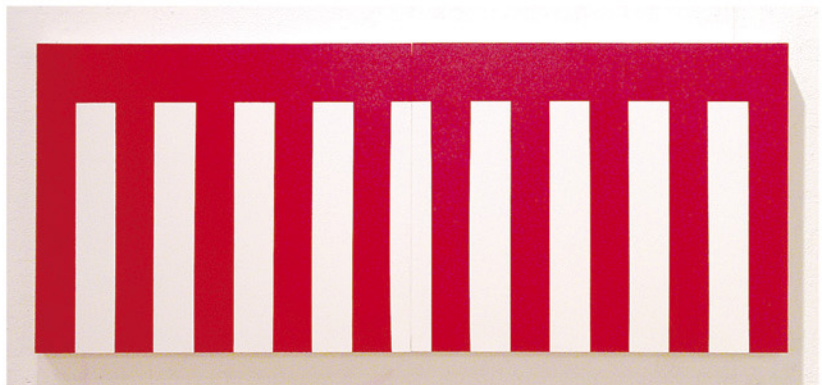
『ビームサーベル・ペイント』

木パネル、墨、ペンキ 57×150cm
2011年



『ドクロ』

木パネル、ペンキ、インク 23×18cm
2010年



『紅白幕1』

木パネル、ペンキ 47×114cm
2011年

写真/小牧 寿里



出光SSで使うとおトクなクレジットカード

持たないなんて、もったいない。

いつでも出光のSSで
ガソリン・軽油 **2円/ℓ引き!**

ただで持ちたい、プレゼントが欲しい、使うたびにトクしたい。
みんなの声に応えるカードで、あなたのショッピングが変わります。



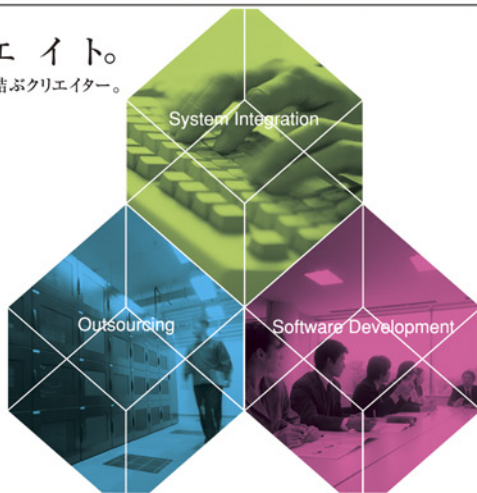
出光カード
まいど
プラス

- おトク1 入会金・年会費はす〜っと無料!
- おトク2 まいど値引きサービスで燃料代がいつでもおトク!
- おトク3 プラスポイントサービスで素敵なアイテムと交換!
- おトク4 ウェブ明細でエコねびき & エコ・プラスポイント!
- おトク5 出光ロードサービスも特別価格でご提供!
- おトク6 ETCカードの年会費も永久無料!
- おトク7 西友でのお買い物物が5%OFF!
- おトク8 紛失・盗難補償付きで安心!

す〜っと **年会費永久無料!**

ITで未来をクリエイト。

私たちHBAは、お客様とおお客様の未来を先進のITで結ぶクリエイター。



3つの事業をリレーション。

最適な情報システムの提案、構築、運用を
万全のセキュリティで総合的にを行います。

- システムインテグレーション事業
求められるニーズに対し基本設計から保守に至るまで総合的なソリューションを行います。
- アウトソーシング事業
万全のセキュリティ対策で、お客様の事業における情報化投資の削減をサポートします。
- ソフトウェア開発事業
プロジェクトマネジメント力を生かし、確かな品質と最先端の技術力を提供します。

HBA 株式会社 HBA

〒060-0004 札幌市中央区北4条西7丁目1番地8
TEL.011-231-8301 FAX.011-281-0915
<http://www.hba.co.jp/>



ご用意しているのは、心地よい時間
庭園という名のホテルでお逢いしましょう。

ご宿泊 ご宴会 ご会合 ご婚礼



RESTAURANT

スヅカ

四川飯店
CHINESE RESTAURANT

地下レストラン
[味の会]



Gp ホテル札幌カーテンパレス 〒060-0001
札幌市中央区北1条西6丁目(道庁南側)
TEL (011) 261-5311 FAX (011) 251-2938 URL <http://www.hotelgp-sapporo.com/>

HOKUSEN
CARD

ひとりひとりの、いまと、つぎへ。



<http://www.hokusen.jp>

株式会社 ほくせん

本社/札幌市中央区南2条西1丁目 北専ビル
TEL (011)261-6101

**HOKUSEN
MY CARD
PROJECT!**

あなたの一枚、をめざして。